

目的 和服着装時の歩行を拘束する主なる要因として、和服の形態上から被服面積が大で平面状であること、着装上から人体の静止立体の状態に下肢全体をまといつけること、その他に履物の形状によるものが考えられる。そこで、これらが歩行にどのような影響を及ぼしているかを解明するために、非拘束時の歩行を基準として、比較検討を行なった。

方法 被験者の両下肢の筋（大腿直筋・半腱様筋・半膜様筋・前脛骨筋・腓腹筋内側頭及び外側頭・ヒラメ筋）について筋電図を取り筋の活動状況を記録すると同時に、足底面に圧力計を取りつけて、支持脚期及び遊離脚期を記録した。また、歩容を捉えるために、歩行速度、1分間歩数についても記録した。着装は、女物長着（ウール地・縮緬地）と履物（草履・下駄）を各2種類用い、着装条件2種類（裾線を水平・裾先上がり7cm）に、基準としての裸足を加えた計11条件について行ない、トレッドミル上で被験者の最も歩きやすい速度を用いて歩行実験を行なった。

結果 1)歩行速度・1分間歩数については、個人特性の方が着装条件による影響より優っていることが示され、歩行（殊にピッチ）の生得的な特性の強いことが示唆されるが速度についてはウール地、裾先7cm上がりの場合に若干の低下がみられる。2)下肢筋の筋活動については、女子については取り難い面が多く、筋電図が明確に弁別できる被験者の筋についてのみ検討した結果、非拘束の状態に比較して和装時は大腿部の動きが制限されるため、下腿部の諸筋の活動が重要となること、左脚と右脚の筋で違いがみられること、下腿三頭筋について、履物による差がみられた。